

研修名 食育・アレルギー対応

令和元年8月28日(水) 13:30～16:00

公演 「保育所におけるアレルギー対応ガイドラインの理解」

「アナフィラキシーショック(エピペンの使用方法を含む)の理解と対応」

講師 国立大学法人上越教育大学大学院 野口 孝則 氏

1 講演要旨

1) 保育所におけるアレルギー対応ガイドライン(2019 年改訂)

目的

保育所保育指針に基づき、保育所における子どもの健康と安全の確保に資するよう、乳幼児期の特性を踏まえたアレルギー対応の基本を示し、保育士等の職員が医療関係者や関係機関との連携の下、各保育所においてアレルギー対応に取り組む際に活用する。

①改訂で一番大きく変わったところ

生活管理指導表(かかりつけ医からの指示、保育所における具体的な生活の場面に応じ

た配慮・管理事項が記載されているもの)の重要さの強調。

- ・ 保育所におけるアレルギー対応に関する、子どもを中心に捉えた、医師と保護者、保育所の重要な“コミュニケーションツール

→担当医と保育士が話し合う機会をもっと作ってほしい

保護者は目の届かないところで生活を送る子どもを不安に感じている。過剰に怖がらず、できることを確実に、適切に対処、実地していく

2) 食物アレルギー

①特徴

- ・食物アレルギーは食物に含まれるタンパク質が原因で起こるものである。
- ・食物アレルギーを有する子どもの割合は 4.0%で、年齢別では離乳食が始まり、様々な食材に触れるため 1 歳児が最も多く、就学前に向けて 0.6%にまで減っている。
- ・食物アレルギーが原因の乳児アレルギー性皮膚炎は、IgE 抗体の感作だけで除去している場合が多いが、一般的には血液や皮膚検査の結果だけで正しく診断することはできない。IgE 抗体検査が陽性であってもその食品を食べられる子どもも多いため、IgE 抗体検査が根拠のアレルギー有無の場合には、保護者と面談し、状態を確認することが必要である。

②予防

- ・原因となる食物を摂取しない事が治療(予防)の基本。
→園の食事提供の対応としては「完全除去」か「解除」の両極の対応が望ましい。

③食物アレルギー病型

- ・即時型
 - …原因食物を食べて、2時間以内に症状が出現するものを指す。症状としては蕁麻疹、持続する咳、ゼーゼー、嘔吐、アナフィラキシーショック。
 - …原因食物によるが、乳幼児期発症例のうち、鶏卵、小麦、牛乳は小学校入学前までに治っていく子どもが多い。
- ・食物依存性運動誘発アナフィラキシー
 - …原因となる食物を摂取して2時間以内に運動をすることで、アナフィラキシー症状を起こす。運動量が増加する中学生に最も多く、原因食物の摂取と運動の組み合わせにより発症するため、食べただけ、運動しただけでは症状は起きず、気が付かずに誘発症状を繰り返す例もある。

④保育所の給食・離乳食の工夫・注意点

アレルギー食対応の単純化

- …食品が運ばれるとき等に多くの過程、人が関わるとヒューマンエラーが起きやすい

ため、作業を単純化すべき。

- …“混入程度なら摂取可、火の通ったものは摂取可ではなく、園で食事提供する際の対応として最も望ましいのは、提供するか提供しない(完全除去)か。”

3)エピペン

アナフィラキシーを起こす危険が高く、万一ショックを起こした場合、直ちに医療機関での治療が受けられない状況下にいる患者、もしくはその保護者が自己注射する目的で作られたもの。中には緊急蘇生に用いられるアドレナリンが充填されている。

アナフィラキシーショックを起こした患者の救命にはアドレナリンを30分以内に投与できるか否かで大きく変わる。…ためらわないことが重要である。

2 感想

野口孝則先生の講演で特に印象に残ったのは、エピペンの使用をためらわないように、素早い判断が必要という話だった。子どもが原因食物を摂取して、アナフィラキシーショック発現から心停止までたった30分しかないと、エピペンを打つことをためらわず

必要に応じて早急に打つようにとの話で、自分が打たねばならない立場になることをいつでも想定して、冷静に立ち回れるように演習等実施していくことが重要に感じた。

そして、エピペンを打ってから 15 分以内の正確な記録が必要なことを知った。何時何分に原因食物を摂取したか、何時何分に症状が発現したか、エピペンを打った時間等、救急隊員へ正確に伝えるためにも、職員間の連携が重要であると感じた。

緊急性が高いアレルギー症状があるか、他覚症状をみて 5 分以内にエピペンを打つかを判断しなければならない。そのために、症状チェックシートを目に付くところに置いたり、職員でシミュレーションをしたりするなどして常に自分が打つ立場にあることを自覚しなければならないと感じた。

しかし、実際に目の前でアナフィラキシーショックを起こした子どもがいたとき、冷静に立ち回れるかと言われると難しい。その場で役割分担をし、職員全体が連携を取って動くことが子どもの命を守ることにつながるのだと感じた。まずは、職員全体でアレルギーの認知を高めることから始めていきたい。

(記録 愛光こども園 谷本祐佳)